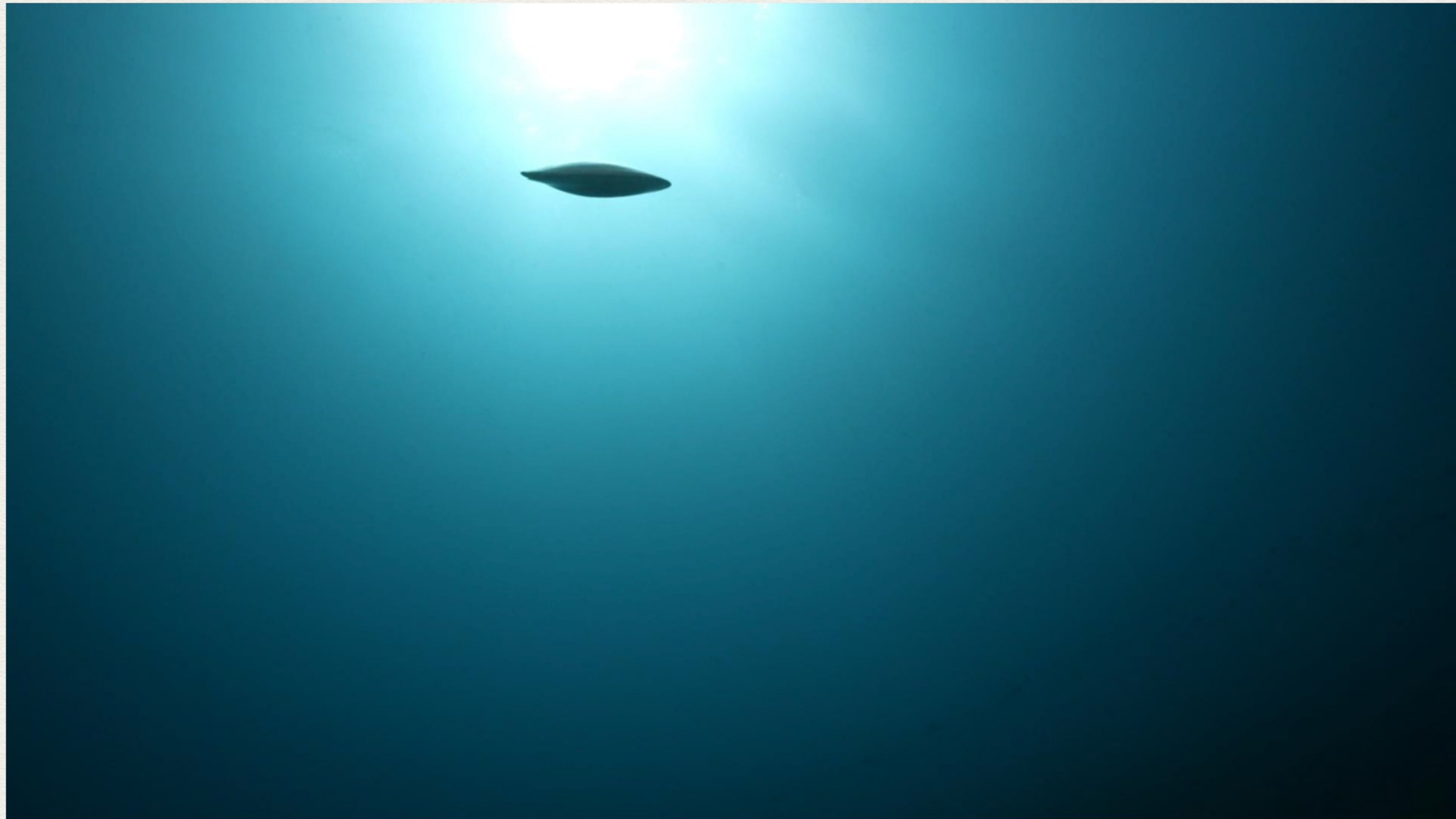


荒木 悠



▶ 双殻綱：第二幕（右）

2021年、ビデオ（17分15秒）

© Yu Araki

CURATOR'S NOTE

貝とは儂さ。貝殻は死にゆく運命の寓意。そして魂の抜けた身体もまた抜け殻になぞらえられる。

貝とは彫刻。貝の表面には二つとして同じ形状を持たない生命の彫刻が施されている。

貝とは寡黙さ。緊張すると堅く口を閉ざしてしまうが、幸せになると唄い出すという。


貝類が地球上に誕生してから5億5千万年といわれる。人間よりはるかに長く、太古の昔から生息してきた貝。そんな貝の歴史を知ってか知らでか、人間は一方的に貝に対してある種の敬意を持って伝説や神話を語り、象徴的意味やアレゴリーを求め、あるいは、日々の食卓を彩る食材として親しんできた。そして、タイトルの「Bivalvia」とは、貝の中でも二枚貝という分類を指すラテン語の学名（二枚貝綱、旧称：双殻綱）であり、2枚の殻は左右に分かれる。

荒木悠は世界各地で豊かな物語や比喻、教訓や寓意をまとってきた二枚貝を起点に、連想と空想の連作歌劇を作り上げる。第二幕となる本作は、一つの疑問から出発する。他ならぬ貝自身は、人に対して、現在の地球に対して、何を思うのだろうか？と。荒木はこの疑問を解明するために、貝へのインタビューを試みる。貝は何を語り、貝と人間とのコミュニケーションは成立するのか？今ここにある作品が右殻であれば、対になるべき左殻はどこにあるのか？そう、この歌劇は日本とオーストラリア、北半球と南半球を右殻と左殻に見立てて、パラレルに展開するのである。

(K.E.)



本作は、シドニー・オペラハウス主催によるオンライン映像プロジェクト
「Returning」（2021年4月末公開予定）で発表される《双殻綱：第二幕（左）》と
対になっています。「Returning」では、オーストラリア、日本、台湾のアーティスト
ト達による新作が発表されます。

<https://www.sydneyoperahouse.com/> 

CREDITS

構想・編集・監督

荒木悠

出演

テイシャ・ハミルトン、小山友也、相原岳弘 / マガキ、ツキヒガイ、ヨーロッパヒラガキ、ホタテガイ、ムラサキイガイ

牡蠣ぬいぐるみ制作

田村なみちえ、三野舞果

水中撮影

奥村康（日本水中映像株式会社）

水中照明

佐藤さやか（日本水中映像株式会社）

水中キャスティング

坂田昌彦（日本水中映像株式会社）

水中撮影（オーストラリア）

カイ・ワシコウスキー

陸上撮影

王博、荒木悠

音楽

田中文久

サウンドデザイン

荒木優光

グラフィックデザイン

宮村ヤスヲ

英語監修

スチュアート・ムンロ

オペラ

「エウリディーチェ」(1600年)

作曲

ヤコポ・ペーリ

台本

オッターヴィオ・リヌッチーニ

歌

キャサリン・アレン

ギター

デニス・ヴァン・ルーイェン

録音

ルアリ・キャンベル

図版

カール・アンドレアス・オーガスト・グース、《オルフェウスとエウリュディケ》1826年、油彩、コペンハーゲン国立美術館

《オルフェウスとエウリュディケ》1900年頃、A.カウフマンの原画をT.ブルケが点刻彫板法により制作した複製画(1782年)からのカラー複写

武蔵石寿、服部雪斎・画『目八譜』、1843年、国立国会図書館

ロケーション協力

はまゆうマリンサービス(静岡県沼津市大瀬崎)、blanClass(横浜)、コンフォートカラオケUTAZOO(東京)、くしろ 炉ばた(釧路)、Endeavour Oysters(シドニー、オーストラリア)、Rijksakademie van beeldende kunsten(アムステルダム、オランダ)、Oesterij BV(ヤーセケ、オランダ)、Koninklijke Prins & Dingemanse(ヤーセケ、オランダ)

Special thanks

アンナ・オルリコフスカ、クーン・デ・ローイ、ロッテ・ナイホフ、オマー・イマム、ホセ・ビスカヤ、アレンド・ナイキャンプ、マルコ・ウィッテフェーン、エリック・サネン、ジャン・ドーゲ、マーティン・ファン・デル・スルージ、ペドロ・デ・アルメイダ、マイケル・ドウ、小田井真美、志村春海、田中麻里奈、貞末彰子、長谷川新、田村よりこ、里見有祐、鈴木拓三、小林晴夫、安部祥子、無人島プロダクション

製作

国際交流基金

制作協力

アーツコミッション・ヨコハマ、シドニーオペラハウス、ジャパン・ファウンデーション・シドニー

キュレーター

木村絵理子

PROFILE



© Yu Araki

荒木 悠（あらかき・ゆう）

1985年、山形県生まれ、東京都を拠点に活動。

文化の伝播や異文化同士の出会い、その過程で生じる誤解や誤訳から生まれる可能性に着目し、歴史上の出来事と空想との狭間にある物語を編み出し、現代を舞台に創造的に再現するような手法で映像作品やインスタレーションを制作する。

近年の主なグループ展に、「Connections—海を越える憧れ、日本とフランスの150年」（ポーラ美術館、神奈川、2020）、「The Island of the Colorblind」（アートソングェ・センター、ソウル、2019）、「Future Generation Art Prize」ファイナリスト（ピンチューク・アートセンター、キエフ、2019）、2017年「The Way Things Do」（ジョアン・ミロ財団現代美術研究センター、バルセロナ、2017）、「岡山芸術交流」（岡山、2016）など。2018年、ロッテルダム国際映画祭で共同監督作品《Mountain Plain Mountain》が招待作品としてタイガー・アワードを受賞するなど、数多くの映画祭にも出品。

Website [🔗](#) Instagram [🔗](#)

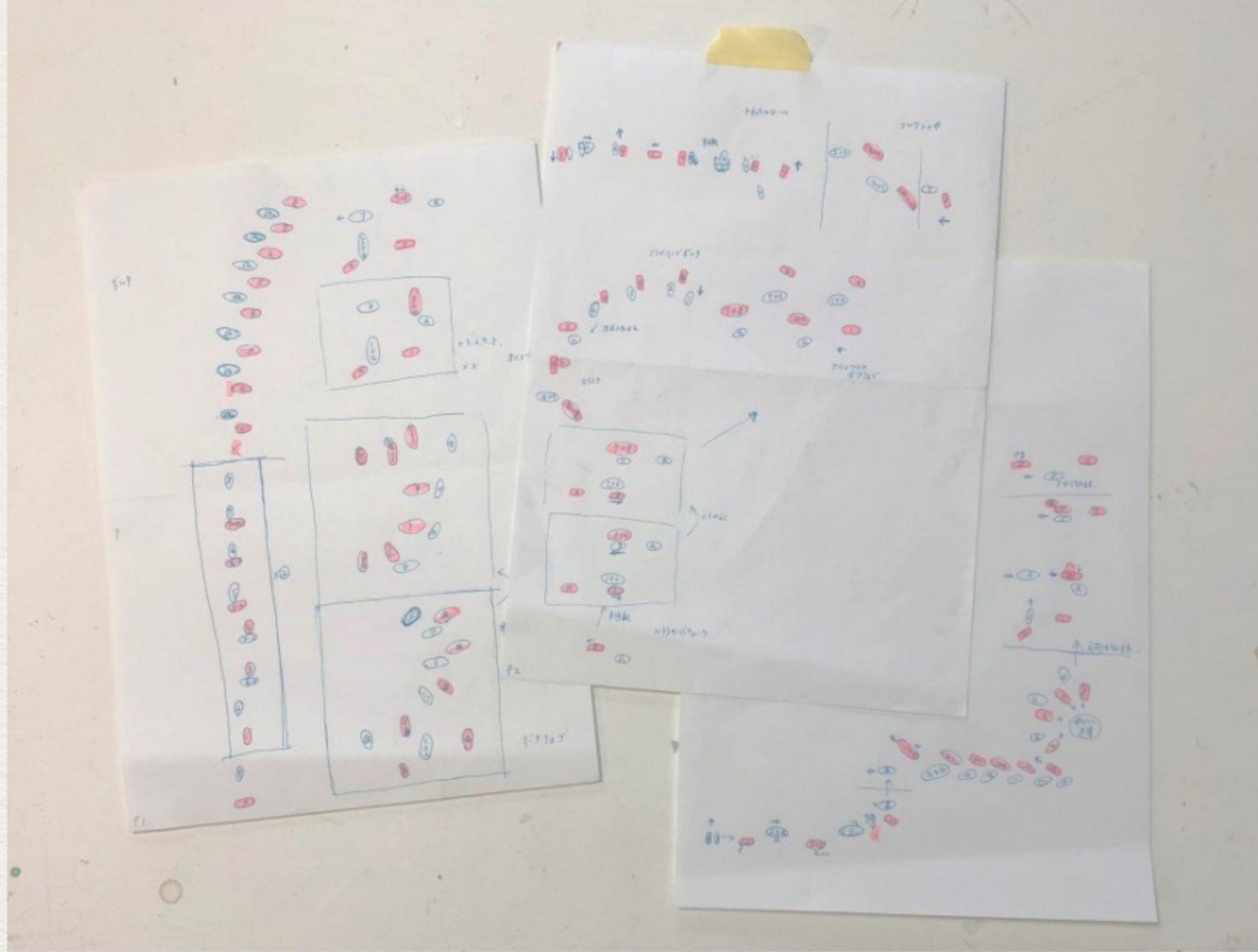
潘逸舟



▶ SLOW SAMBA -- Practice to Dance with You --

2021、ビデオ (11分34秒)

© Han Ishu



ドローイング、297 x 210mm、3枚組

CURATOR'S NOTE

開国まもなくから、外国との玄関口であった港町・神戸。外国人居留地跡が残る異国情緒にあふれたこの街は国内有数の観光地である。神戸はまた、さまざまな産業が営まれてきた土地であり、現在その労働の担い手の多くは外国人技能実習生である。労働人口の減少にあえぐ日本の産業は彼らなしには成り立たず、反面その待遇の低さは目を背けられてきた。

2019年から20年にかけて、潘は神戸での個展に際してこの街を訪れ、製靴工場をはじめ外国人技能実習生が従事する労働と日常生活の現状を、彼らとの交流を通じて調査した。取材の過程で、神戸の地が「外国からの玄

関」であったのみならず、かつて多くの日本人がブラジルへ移住した「旅立ちの地」であったことがわかる。移民としてブラジルでの労働に従事した日本人、そして現代の日本に暮らし、働く外国人技能実習生。それぞれの背景が挿入された「靴とのダンス」は、連綿と続く支配／被支配の構図を露わにすると同時に、時代や国がいかに異なろうと「ともに踊る」ことで関係を結び得るという希望を示す、両義的な行為といえるだろう。

(N.S.)

CREDITS

潘逸舟

協力

ANOMALY、一般財団法人日伯協会・移住ミュージアム、株式会社ベル、神戸アートビレッジセンター、神戸映画資料館、国際交流基金、国際交流シェアハウスやどかり、MAY加工所、嶺岸ソーシャルダンスカンパニー

PROFILE



撮影：野村佐紀子

PROFILE



撮影：野村佐紀子

潘逸舟（はん・いしゅ）

1987年、上海生まれ、東京都を拠点に活動。

社会と個人の間で生じる疑問や戸惑いに着目し、共同体や社会におけるコミュニケーションの成り立ち、アイデンティティのあり方を、自らの身体や大量生産されるものを用いて問う映像作品、インスタレーションを発表している。

主な展覧会に、「日産アートアワード2020 ファイナリストによる新作展」（ニッサンパビリオン、2020）、「Thank You Memory—醸造から想像へ—」（弘前れんが倉庫美術館、青森、2020）、「いらっしゃいませようこそ」（個展／神戸アートビレッジセンター ART LEAP2019、兵庫、2020）、「The Drifting Thinker」（個展／MoCAパビリオン、上海、2017）、「Sights and Sounds: Highlights」（ユダヤ博物館、ニューヨーク、2016）など。日産アートアワード2020」グランプリ受賞。

HAN Ishu [☞](#) ANOMALY [☞](#)